文化財総合的把握モデル事業

ひと・まち・石

問合先　教育委員会
生涯学習課文化財係
☎448－8255

第11回 ナゾの大石、石の宝殿

JRの駅名にもなっている石の「宝殿」。竜山石をくりぬき、推定五〇〇トンと言われるこの巨大な石造物は、江戸時代には参勤交代の西国大名が立ち寄り、小林一茶が俳句を詠み、先進国のオランダ人が驚き、多くの絵によって紹介されるなど、すでに名所中の名所となっていたようです。

今回の事業にあたり、シンボル的な役割を果たすのも当然のことでしょう。

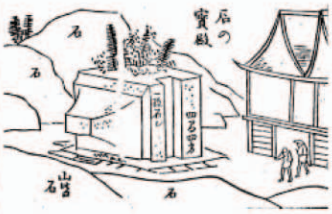
ところで、この石の宝殿、奈良時代の書物に登場するほど歴史の古さは折り紙付きですが、さてさて、何の目的で造られたのか、さっぱりわかりません。奈良時代の人も「大石」とよび、「形は家のよう」と記しているだけで、この頃にはすでに「?」となっていたようです。すると、奈良時代よりも、もっと古い時代、一三〇〇年以上も前に造られていたことになります。

中世の人々は、この難解な石造物を理解するために、神々を登場させました。名付けて「生石大神」。嫉妬深い女性の神様だそうで、北側の高御位大神と夫婦であるとされています。今に続く生石神社の縁起もこの二神が登場しています。そして、石の宝殿は、神々が造りかけた社であり、夜が明けたために押し起こせないままになってしまったものだ、と考えました。石の宝殿、社未完成説の誕生です。実はこの「起こし家形未完成説」は今でも考古学者がまじめに唱えている学説の一つです。さすがに神様にご登場いただくわけにはいかないので、今の学者さん達は、いろいろと理屈をこねていますが。

実は、この石の宝殿について学界でも定説があるわけではありません。完成か、未完成か?起こすか、起こさないか?残念ながら、どの説も石の宝殿をゆるがす程の説得力はありません。

それはそれとして、人々は実に八〇〇年以上もの間、この大石に神々の姿を見てきました。石の宝殿の周りを見ますと、拝殿や燈籠、鳥居、玉垣など、その心が形となって神聖な独特の空間を生んでいます。竜山石の柔らかな風合いも一翼を担っています。一三〇〇年前の竜山石の石工が残したナゾの石造物を、今後どのようにして活かし、伝えていくのか。ナゾ解きだけでは済まされない大きな課題が、今を生きる私達には残されています。

（兵庫県立考古博物館　中村　弘）



石の宝殿（『大日本史』江戸後期）